

『在津紀事』の二つのエピソード

頼春水(1746~1816)は、21歳で郷里(現・広島県の竹原)を出て、広島藩の儒者に迎えられ36歳まで大坂ですごした。28歳頃の春、江戸堀(現・大阪市西区)の川面に面した家を借りて「春水」を号し、この地で息子の頼山陽が生まれる。古地図で調べると、山陽生誕の碑がある現在地より、もっと東側だったようである。

晩年に大坂での思い出をつづった『在津紀事』は、漢詩の結社・混沌社の仲間を中心に、大坂の学者や文人のエピソードが満載されている。タイトルの在津とは摂津国に在った時という意味で、堅物の朱子学者のイメージがある春水だが、宮仕えしていない在野時代、大坂の自由な空気を存分に楽しんでいる。

今年、大学では、「青春の文学」とも呼べそうなのこの回想録を講読演習のテキストにしたが、御座船を地車の源流と紹介した前号につづき、船が登場する、なにわの文人らしい愉快的なエピソードを『在津紀事』から二つ紹介しよう。

春水とも昵懇の吹田屋六兵衛こと、森田士徳(1738~82)は、新靱町(現・西区)で乾魚を商う裕福な商人である。中国風の書をこよなく愛した文人であり、男気のある人物だった。

士徳は二隻の「巨艦」を所有していた。日本海を廻り、蝦夷地の物産を運ぶ北前船だろう。春水をその船上での月見に誘う。小舟で安治川に出て「巨艦」に到着し、舵楼に上った。舵楼は船尾の舵を操る建物である。屋根は二十人ほどが座れる広さだった。

春水は「森家千石遮洋の舟、繫いで浪華第一洲に在り」(現漢詩)と詠んだ。森家は森田士徳、遮洋の舟は大海を横断する巨船、浪華第一洲は、滯つくしのある海と川の境界あたりを指す。大船で大坂港に出入りする旅人は、ここで小舟に乗りかえた。

潮が満ちて水位があがり、堤上の家が、しだいに眼下になる。表紙「川崎ノ渡シ月見景」(「浪花百景」)は大川の屋形船での月見で、燭台に囲まれた碁盤が準備されるなど風趣に富むが、繊細な川での月見とは異なり、海上でながめる煌々たる満月は、ダイナミックだったろう。

『在津紀事』には、もうひとつ青年らしいエピソードが記される。後に福岡藩の儒者になる亀井南溟(1743~1814)が森某(不明。あえて某としたか)と京都から帰国の途中、来坂した。二人とも頭はボサボサ(髻髪収めずして蓬蓬然たり)で、言葉や顔つきは「疎宕」、すなわち気迫に満ちて枝葉末節にこだわらなかつた。

いざ、帰国の船に乗る段になって、森君の姿

がない。「この地は楽土なので故郷に帰りたくない」と、森は漏らしていたらしく、大坂に留まる計略ではないかと世話役の塾生がいぶかる。しかし、亀井は「腰の物は全部、彼に預けてある。居残る計略ならば財布を私に返して実行するはずだ」と剛毅で安心している。たしかに夜に森君は戻り、何事もなく二人は乗船して福岡へ帰っていった。

大らかな話だ。森君はどこに雲隠れしていたのか。尋ねるのは野暮かもしれないが、わが街を「楽土」と讃えてくれて大阪人としてうれしい。

大学で話を現代におきかえ、九州の大学から来た院生や若い先生の送別会を開き、新大阪や伊丹空港に見送ったとき、改札口で一人いません、という事態になったらどうする? と質問してみたが、こんなたとえ話をするのではなかつた、九州の知人の顔と口調が浮かび、学生の答えの前に私が笑いだして止まらなくなつた。



菱垣廻船「浪華丸」。かつて大阪市が復元した北前船が大坂湾を帆走する。帆の向こうの高い部分が舵楼(だろう)。(提供:大阪市港湾局)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大坂イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。

いちよう並木8月号(No.437)「おおさかKEY わーど第104回」に掲載した青木月斗の俳句について、次のとおり訂正します。

雲の峰は大阪焼ける煙かな